

原 著

# 介護職者および介護職を目指す学生におけるリハビリテーションに関する意識調査

—職業意識の考察の一環として—

峯松 亮

畿央大学健康科学部理学療法学科

(平成15年5月9日受付)

**要旨：**職業上、介護職は患者の生活に密着しているため、多くの知識と技術を要する。そこで、リハビリテーション（以下リハ）の観点から現役の介護職者と介護職を目指す学生の意識調査を実施し、職業現場と教育現場の関連を検討した。その結果、リハへの興味、リハ技術の必要性、リハ講習への参加に対して介護職者と学生に意見の違いが見られた。また、リハイメージにおいては、6項目に対して有意な差が認められた。身体面へのイメージがともに多く挙げられたが、自立生活活動やその援助、精神面に関するイメージを挙げた者は学生では非常に少数であった。実際に職場で働くようになると多くの事を経験、体験していき、自分の職種の立場・役割、他職種との関係などを理解する。また、それによって患者の全体像を捉えられるようになる事が示された。興味の対象、程度は個人的因子、職場環境因子だけでなく、職業意識にも左右されると考えられる。これらの事は必然的ではあるが、介護職に就き、介護職者としての職業意識を持つためには教育が基盤になると考えられる。教育現場と職業現場の連携を密にする事により、現場に即した教育を行い、興味を引き出し、職業意識を高める事が可能と考えられる。また、教育の質の向上を図ることが可能と考えられる。

(日職災医誌, 51: 405—409, 2003)

—キーワード—

介護職者, 学生, 職業意識

## はじめに

高齢化社会に突入し、入院（所）、通院（所）を問わず、医療・保健・福祉施設を利用する高齢者は増加している<sup>1)2)</sup>。これらの病院・施設において、介護福祉士、ヘルパーを中心とする介護職の需要は高い。介護職は起居動作、移乗、移動等の身体活動の介助や食事、整容、入浴、排泄のケアと幅広く介護する。また、リハビリテーション（以下リハ）活動、レクリエーション活動にも関わり、患者の身辺動作から身体活動まで幅広く介助することになる。そのため、患者の生活のほとんど全てに関わり、患者と接する時間も長い。このことから、介護職者には多くの知識と技術の習得を要する。その中でも、リハは介護を行う上で日常生活活動自立、社会・家庭復帰を目指す患者にとって重要である。そこで、現役の介護職者と介護職を目指す学生の職業意識について、リハ

知識・技術の観点からアプローチし、職業現場と教育現場での関連を考察した。

## 対象と方法

対象は某老人保健施設に勤務する19名の介護職者と某福祉専門学校で介護福祉士を目指す学生38名とした。介護職者は介護福祉士、ヘルパー1または2級のいずれかの資格を有しており、就業期間は9カ月から4年であった。対象学生はリハ教育（リハ医学、リハ概論、介護技術）を履修済みの者とした。

介護職者および学生の職業意識について、両者に対しリハ知識・技術に関するアンケート調査（表1）を行い、その結果を比較・検討した。データの分析は、介護職者と学生の意識の差を見るためFisherの直接確率検定を用いた。

## 結 果

アンケートの回収率および有効回答率は100%であった。

表1 介護に関するリハビリテーションアンケート

1. 就業する前までに「リハビリテーション」という言葉を聞いたことがありますか。
2. 就業する前までに「リハビリテーション」の現場を見たことがありますか。
3. 「リハビリテーション」のイメージはどのようなものですか。 1: 身体機能回復, 2: 身体機能維持・改善, 3: 廃用予防, 4: 自立生活動作向上, 5: 自立生活援助, 6: コミュニケーション, 7: 社会復帰, 8: 精神的ケア, 9: その他
4. 「リハビリテーション」に興味がありますか。 1. 興味がある 2. ある程度は興味がある 3. 分からない 4. あまり興味はない 5. 興味はない
5. 介護職者にリハビリテーションの知識は必要だと思いますか。 1. 必要 2. ある程度必要 3. 分からない 4. あまり必要ない 5. 必要ない
6. 介護職者にリハビリテーションの技術は必要だと思いますか。 1. 必要 2. ある程度必要 3. 分からない 4. あまり必要ない 5. 必要ない
7. 介護職者にリハビリテーションの知識を学ぶ必要があると思いますか。 1. 必要 2. ある程度必要 3. 分からない 4. あまり必要ない 5. 必要ない
8. 介護職者にリハビリテーションの技術を学ぶ必要があると思いますか。 1. 必要 2. ある程度必要 3. 分からない 4. あまり必要ない 5. 必要ない
9. 今後、リハビリテーションの知識、技術を学ぶ機会があれば、それを受けたいと思いますか。 1. 参加する 2. 参加すると思う 3. 分からない 4. 参加しないと思う 5. 参加しない

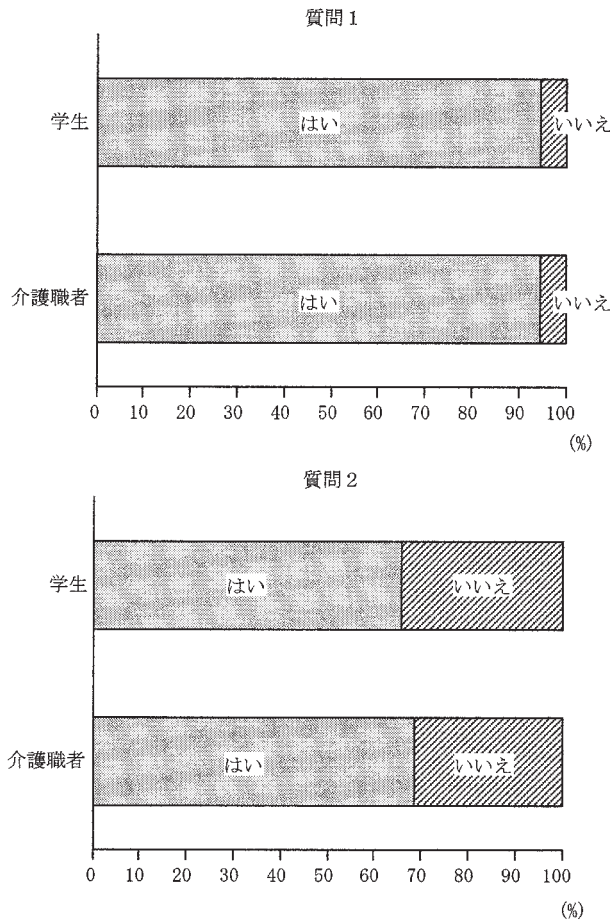


図1 アンケート質問1, 2に対する回答

リハという言葉を知ったことがあるかについては、介護職者、学生ともに9割以上の者がいると答えたが、リハ現場を見たことがあるかについては、7割弱の者がいると答えた(図1)。リハのイメージに関しては、表2に示したように項目2, 3, 4, 5, 6, 7において介護職者と学生に有意な差が認められた。介護職者は項目1, 2

を挙げたものが8割以上に達し、項目4も約8割に達した。また、項目7(社会復帰)を約半数のものが挙げ、項目6(コミュニケーション)、項目8(精神的ケア)を挙げた者もいた。一方、学生は項目1を挙げた者が最も多く約7割であったが、その他の項目を挙げた者は2割に満たなかった(項目9:その他は除く)。特に、項目6を挙げた者はなかった。両者とも身体面へのイメージが強かった傾向があり、特に学生の場合、患者との結びつきや自立動作に関してよりも、患者個人の身体動作能力に焦点を当てる傾向が目立った。リハに対する興味についても差が認められ、学生では分からない、あまり興味がないという回答が約3割であった(図2)。

ほとんど全ての介護職者および学生は介護職にリハ知識が必要(ある程度必要を含める)と答えたが、リハ技術に対しては有意な差が認められ、介護職者で約5%、学生で約10%の者が必要ないと答えた。また、両者ともにリハ技術を必要とした者は8割を超えたが、学生の方が必要と答えた者は介護職者よりも多く(73.4%と31.6%)、介護職者はある程度は必要と答えた者が最も多かった(52.6%)、(図3)。リハ知識・技術を学ぶ必要性に対しては、知識および技術とも両者の回答に差は認められなかった。ほとんど全ての者がリハ知識を学ぶ必要性を感じており、リハ技術を学ぶ必要性を感じている者も9割近くに達したが、必要性を感じないと答えた者は介護職者で約5%、学生で約10%に認められた。また、リハ技術を学ぶ必要性を感じている学生が半数にいたのに対し、介護職者は21.1%と低く、ある程度は必要と答えた者が最も多く約7割であった(図4)。質問8の結果と質問6の結果の傾向は類似していた。

今後、リハ知識・技術を学ぶ機会に参加するかという質問では、ほとんどの者が参加するとしており、参加しないと答えたものはなかった(図5)。

表2 アンケート質問3に対する回答

	1	2**	3*	4**	5*	6*	7*	8	9
介護職者	89.5	84.2	31.6	78.9	31.6	15.8	47.4	21.1	10.5
学生	68.4	18.4	5.8	18.4	7.9	0	18.4	7.9	31.6

1：身体機能回復，2：身体機能維持・改善，3：廃用予防，4：自立生活動作向上，5：自立生活援助，6：コミュニケーション，7：社会復帰，8：精神的ケア，9：その他。

各項目における介護職者と学生の回答の有意差（\*：P < 0.05，\*\* P < 0.0001），数字は（%）

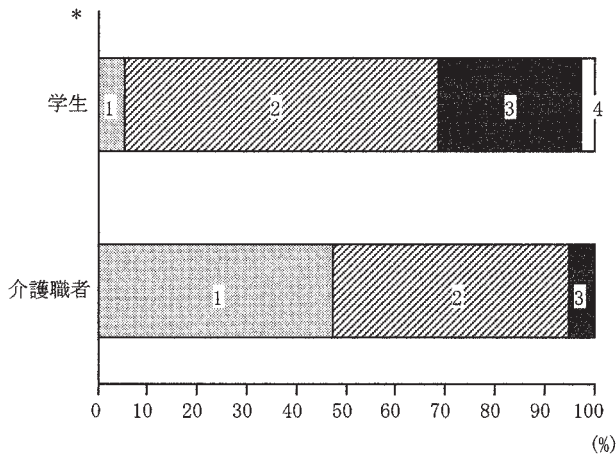


図2 アンケート質問4に対する回答

1：興味がある，2：ある程度は興味がある，3：分からない，4：あまり興味はない。

\*：介護職者と学生の回答分布における有意差（p < 0.01）。

### 考 察

リハ教育を行うことにより，学生は履修前よりもリハに興味を持ち，その知識・技術の必要性を理解する<sup>3)</sup>。そのため，介護分野だけにとどまらず介護関連分野にまで専門的知識を得るために教育は非常に重要である。特に，医療従事者を目指すものにとっては，協業も必要のため他職種への理解が必要である。しかし，学校内の教育だけでは補えない部分があるのも事実である。職業教育の中でのギャップについての報告<sup>4)5)</sup>もあるように，いかなる職種においても，理論と現実，教室と現場では少なからずギャップが生じる。介護職者の場合，前述したように患者の生活に直接的に関わり，接する時間が長いため，介護職就業後に感じるギャップは大きいと考えられる。

今回，リハの観点から介護職者と学生の意識調査を行ったところ，両者に関して特徴的な結果が認められた。アンケートの質問1，2に見られたように，就業前にリハについて耳にしたり，目にしたりする事については介護職者と学生に差は見られなかった。しかし，リハイメージに関しては大きな差が認められた。介護職者，学生とも身体面へのイメージが強く，学生では身体機能回復を挙げた者が最も多く約7割であったが，他の項目を挙

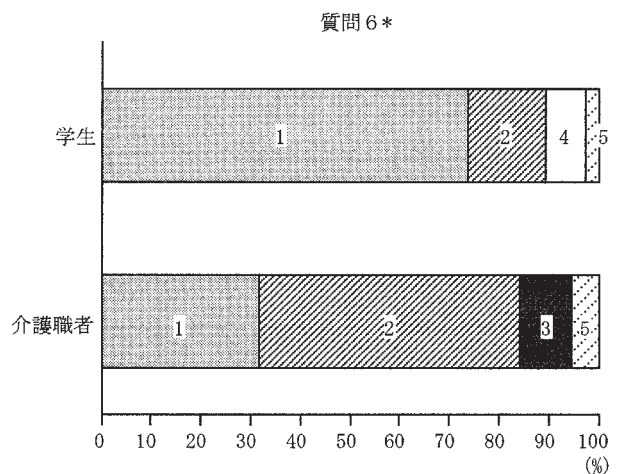
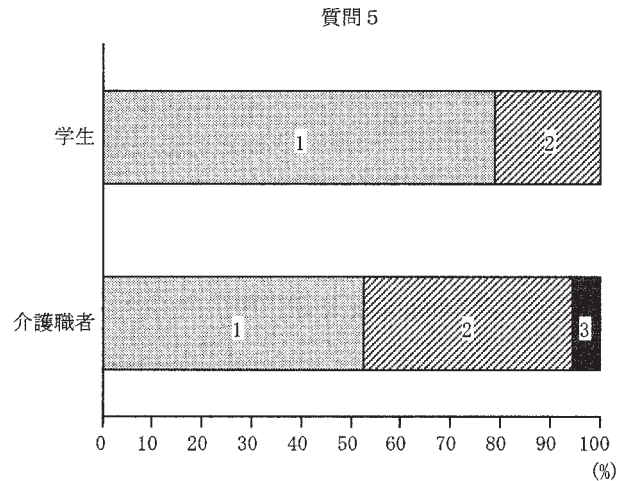


図3 アンケート質問5，6に対する回答

1：興味がある，2：ある程度は興味がある，3：分からない，4：あまり興味はない，5：必要ない。

\*：介護職者と学生の回答分布における有意差（p < 0.01）。

げた者はどれも2割に満たなかった。全てのリハイメージ項目で，学生は介護職者よりも少数であり，項目2～7では有意な差が示された。その差は項目2（身体機能維持・向上），4（自立生活動作向上）で顕著であり，学生のリハへのイメージは身体機能回復に重点が置かれ，同じ身体面でも維持，予防，生活動作，援助に結びつくイメージは弱いようであった。このことは，教育現場と職場での意識の植え付けに大きく関係していると考えられる。日々の患者の生活に密着して介護を行っていることから，介護職者は患者の生活の中での動作を見つめる

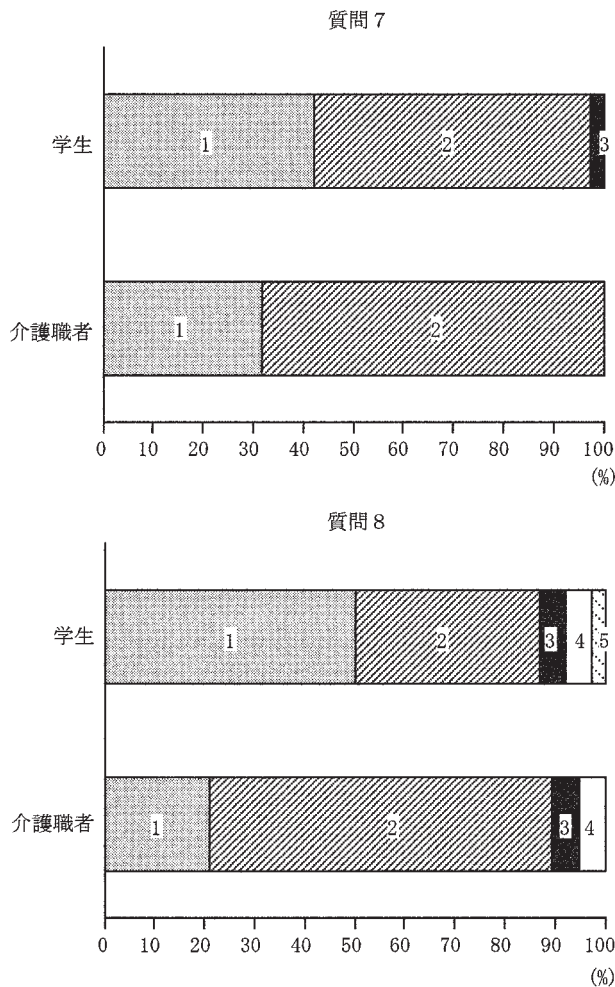


図4 アンケート質問7, 8に対する回答

1: 必要, 2: ある程度は必要, 3: 分からない, 4: あまり必要ない, 5: 必要ない.

事ができ、社会復帰（退院、退所）を目標として取り組んでいる事がうかがえた。同時に、患者と接する中でコミュニケーションや精神的ケアの必要性、重要性を直接的に感じている事が認められた。すなわち、介護職者が職場を経験、体験する事により学校で学べなかった事を学び、視野が広がる。また、それによりギャップを埋め、臨機応変な対応を学んでいく事が分かった。

学校教育の一環として、臨床現場での実習が課せられるが、患者と接する事、業務を体験する事、現場の雰囲気を知る事など、非常に重要なカリキュラムの一つであると考えられる。しかし、今回の結果からも、学生と介護職者の職業意識には差がある事は明らかであった。学生のイメージと介護職者のそれとに差が認められたのは、教育現場と実際の職場のギャップに他ならない。自分の職種とそれに関わる他職種、患者の状態などを多方面から見る目を養う事によってこのギャップが埋まり、ギャップを埋める事で職業意識の高まると考える。このような

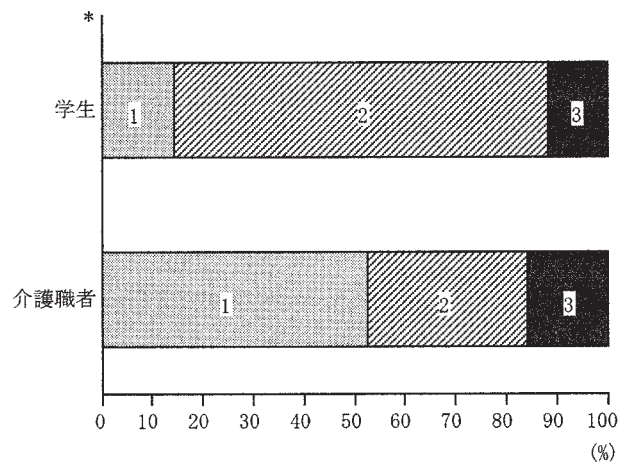


図5 アンケート質問9に対する回答

1: 参加する, 2: 参加すると思う, 3: 分からない.

\*: 介護職者と学生の回答分布における有意差 ( $p < 0.05$ ).

ギャップが生じる事は必然的な事であり、必要な事であると思われる。このギャップを埋め、職業意識を高めていくためには職場での経験・対応と向上心が必要である。その基盤となるのは教育であり、教育現場と職業現場の関係を考える事は重要である。

## 文献

- 1) 厚生労働省：平成13年社会福祉施設等調査の状況。  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/fukushi/01/index.html>.
- 2) 厚生労働省：平成13年医療施設（動態）調査・病院報告の状況。  
<http://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/iryosd/01/index.html>.
- 3) 峯松 亮, 吉村 理：初めてリハビリテーション教育を受ける福祉専門学校生のリハビリテーションに対する考え方の変化。日本職業・災害医学会誌 50(1): 20—24, 2002.
- 4) Bligh JG, Harden RM: Bridging the gap between hospital experience and general practice during vocational training. Med Teach 12(2): 169—173, 1990.
- 5) Bosch B: Status and value of vocational education centers in the system of vocational education. Rehabilitation 26(4): 193—198, 1987.

(原稿受付 平成15.5.9)

別刷請求先 〒635-0832 奈良県北葛城郡広陵町馬見中4-2-2

畿央大学健康科学部理学療法学科  
峯松 亮

## Reprint request:

Akira Minematsu  
Faculty of Health Science, Department of Physical Therapy,  
Kio University, 4-2-2 Umaminaka, Koryo-cho, Kitakaturagi-  
gun, Nara 635-0832, Japan

OPINION POLL OF REHABILITATION GIVEN TO CARE WORKERS AND STUDENTS  
—A LINK OF CONSIDERATION OF TAKING THEIR JOB—

Akira MINEMATSU

Faculty of Health Science, Department of Physical Therapy, Kio University

This study investigated the view of rehabilitation (rehab) of care workers and students. There were the differences between care workers and students about interesting of rehab, necessity of rehab, and participation of rehab lecture. The rehab. images in the six categories were also significantly different between the two, Most of them gave physical images, and students who answered for an independence of activity of daily livings, its support, and mental category were few. It was considered that care workers understood positions, roles, and relation of their and others' jobs with their experiences in their job. It was shown that they were able to get at whole patients' pictures through their job, too. These are inevitable, and education is a base to take their job as a professional. Education based on their job can make students have interesting and aspiration with keeping in close touch with the working spot. This can press for improvement in the quality of education.

---